

## 論文 Article

小中学生における地域愛着意識の基礎的研究  
—埼玉県長瀬町の事例—

原稿受付 2024 年 7 月 31 日

ものづくり大学紀要 第 14 号 (2024) 37~44

竹原正勝<sup>\*1</sup>, 田尻要<sup>\*2</sup>, 小池優貴<sup>\*1</sup><sup>\*1</sup> ものづくり大学大学院 ものづくり学研究科 ものづくり学専攻<sup>\*2</sup> ものづくり大学 技能工芸学部 建設学科

**概要** 埼玉県長瀬町では社会動態として毎年 200 から 300 人が転出をしている現状がある。持続可能な地域の形成に向け「まちづくり教育プログラム」を立案し、プログラムには短期的に持続可能な地域形成、長期的にはUターンや移住・定住人口の創出が期待される。プログラム実行にあたり小中学生の地域愛着意識の醸成を行う必要性から、長瀬町の小中学生において地域愛着意識と関連性の高い要因の調査分析を行い、具体的な検討を行った。

**キーワード** : 持続可能な地域, 地域愛着意識, 地域活性化

## A basic study of community attachment attitudes among primary and junior high school students-A case study of Nagatoro-cho, Saitama Prefecture, Japan

Masakatsu TAKEHARA<sup>\*1</sup>, Kaname TAJIRI<sup>\*2</sup>, Yuki KOIKE<sup>\*1</sup>,<sup>\*1</sup> Graduate student, Graduate School of Technologists, Institute of Technologists<sup>\*2</sup> Professor, Dept. of Building Technologists, Institute of Technologists, Dr. Eng**Abstract**

In Nagatoro-machi, Saitama Prefecture, the current social dynamic is that 200-300 people move out every year. A 'Community Development Education Programme' has been developed for the formation of a sustainable community, which is expected to create a sustainable community in the short term, and in the long term, to generate U-turns, migration and permanent population. In order to implement the programme, a survey and analysis of factors highly related to the sense of community attachment among elementary and junior high school students in Nagatoro-machi was conducted and specific studies were carried out to examine the necessity of fostering a sense of community attachment among them.

**Key Words** : Sustainable regions , sense of community attachment , community revitalisation

## 1. はじめに

昨今、全国の地方都市は人口減少に加え、都市への人口流出の同時発生による地域活力の低下が課題となっており、いかにして地域に関わる人口をつなぎ止め、増やしていくかが存続の重点と考え

られている<sup>1)</sup>。持続可能な地域の形成には住民主体のまちづくり基盤の確立が重要であり<sup>2)</sup>、住民の意見発信の場や協力体制の整備、移住促進施策を行う必要がある。そういった中で、地域町おこし隊、Uターン・移住促進等に取り組む自治体は少なくないが、安定した関係人口の増加は見られてい

ない。埼玉県長瀬町では社会動態として毎年 200 から 300 人の転出をしている現状があり<sup>3)</sup>、これらのような施策に取り組む必要はあるが、それに加え若年層の段階から地域との関係解消を引き留めるためにまちの施策として小中学生の時点で地域との関係を深いものにしていくことが考えられる。

## 2. 「まちづくり教育プログラム」の概要

小中学生の早い段階から地域教育による地域理解やまちづくり活動を通して、活躍できる場の創出や地域に求める意見の反映を行うだけでなく、プログラムを通し仲間と協力する過程で同じ年代の人に加え、様々な年代の人とのコミュニティ醸成を行うことで、持続的なコミュニティ形成が可能になり、地域とのつながりを深いものとする。そうすることで、将来的に若年層が転出したとしても、転出した先での新たな人とのつながりを活かし地元の人のみならず、町外の人を巻き込んだ関係人口の創出が行えるのではないかと考えられる。つまり、地域教育施策である本プログラムを実施することで、まちづくり基盤の確立と住民と地域の関係解消を引き留めつつ、町外の人を巻き込んだ関係人口の創出が可能となる。そのため、本プログラムでは持続可能な地域のまちづくりを担う人材の育成と縦の関係創出を行う。

次に、本プログラムが目指す人材循環サイクルを Figure1 に示す。このサイクルにより、短期的視点では住民主体のまちづくり基盤の確立が可能になり、持続可能な地域の形成に繋がると考えられる。長期的視点では将来まちに戻ってくる元住民をある程度確保しつつ、元々長瀬を知らなかった人がまちに興味を持つことで移住・定住が期待される。そのため、若年層、とりわけ小中学生を対象にしたまちづくり教育プログラムを行うことで地域への理解と活動を通じ、地域への愛着意識醸成と関係の創出を行い、住民と地域の関係解消を引き留めるだけでなく、町外の人との関係人口創出に取り組む。

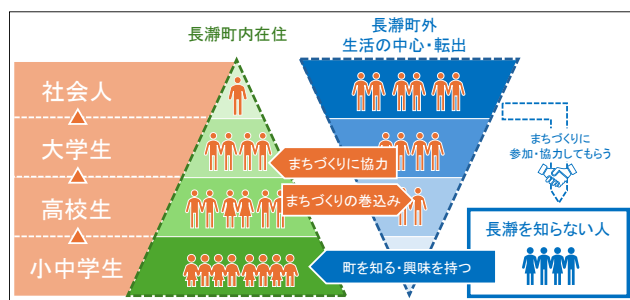


Figure 1 Sustainable regional human resources circulation cycle

## 3. 本研究の目的

持続可能な地域のまちづくりを担う人材に必要な素養として、地域を愛する気持ちである地域愛着意識と地域社会で活躍するための基本的な能力である社会人基礎力の2つが挙げられる。これら2つの素養を持つ持続可能な地域のまちづくりを担う人材を「地域を愛し、地域課題を発見して主体的に仲間と協力し解決に動くことのできる人材（以下「地域まちづくり人材」と略）」と定義する。

次に、地域まちづくり人材育成フローを Figure2 に示す。本プログラムの目的を達成するために本研究では、地域まちづくり人材育成フローの第1段階である地域愛着意識の醸成に着目し長瀬町の小中学生における“愛着心の要因”を分析する。具体的には埼玉県長瀬町の小中学生を対象とし、まちとの関わりやまちへの意識に関して調査を実施、愛着心との関連性を明らかにすると共に長瀬町の児童において愛着心の醸成と関連性の高い要因を分析する事によって、地域まちづくり人材の育成と地域教育を通じ学年を超えた地域コミュニティの醸成施策の検討を行う。

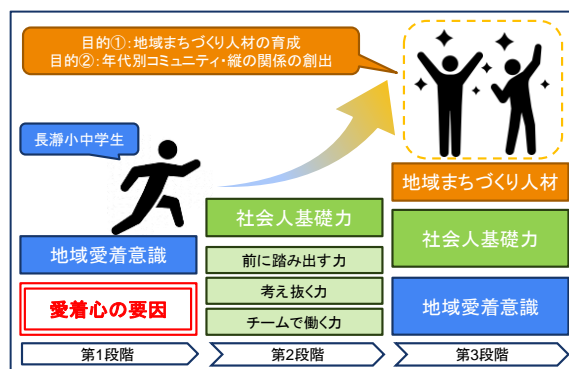


Figure 2 Regional community development human resource development flow

## 4. 調査概要

調査概要を Table1 に示す。本調査は長瀬町の長瀬第一・第二小学校、長瀬中学校の以上 3 校における小学 5,6 年生、中学 1～3 年生に対してアンケート調査を実施した。

Table1 survey overview

項目	概要		
調査対象	長瀬第一・第二小学校 5,6 年生 長瀬中学校 1, 2, 3 年生		
調査方法	アンケート方式		
調査日時	11/21(火)～12/14(木)		
回収方法	生徒回答用紙を学校で回収後、研究室が直接回収		
調査場所	長瀬第一小学校	長瀬第二小学校	長瀬中学校
回収部数(回収率)	64/72部(88.9%)	21/21部(100.0%)	132/143部(92.3%)

## 5. 地域愛着意識の分類

小中学生における地域愛着意識を把握するため、Table2 の質問への回答をもと、“とても好き”と回答した層は“愛着意識 高”、“まあまあ好き”と回答した層は“愛着意識 有”、その他を回答した層は“愛着意識 無”とカテゴライズ設定した。

Table2 Questionnaires on sense of community attachment

質問 17 あなたは、長瀬町が好きですか。(1つに○)
(1)とても好き (2)まあまあ好き (3)どちらでもない (4)あまり好きでない (5)全く好きでない

## 6. まちとの関わりと地域愛着意識

まちとの関わりに関する分析では、小学生と中学生では活動範囲・時間や所属コミュニティが大きく変化するため、まちとの関わり方が全く別のものであると考えられることから分別して分析を行う。また、まちとの関わりについては地域に対して直接的に活動を行う地域活動と、地域内での繋がりや活動におけるコミュニケーションが色濃く反映される日常会話にそれぞれ着目し分析を行った。

### 6.1 地域活動経験に着目した分析

#### ①地域活動の経験

小中学生の地域愛着意識と地域活動経験の関連性を Figure3 に示す。小学生に着目すると“1 種類のみ”に該当する児童の場合、“愛着意識 高”の割合は“経験なし”の割合より少なく、“2 種類以上”の場合愛着意識は高くなる傾向にあり、中学生の場合

地域活動経験のある児童は多くなる傾向にあるとわかった。

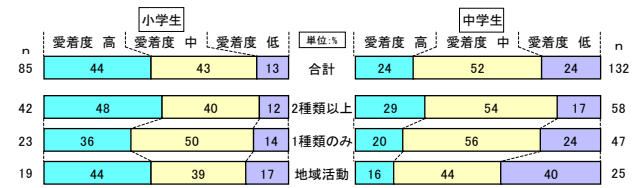


Figure3 Regional community development human

resource development flow

#### ②地域活動の種類

地域愛着意識と地域活動の種類による関連性を示したコレスポネンシス分析の結果を Figure4 に示す。“愛着意識 高”の層は、学校での生徒会活動や委員会、地域のコミュニティなどにおいて自発・主体的な参加が求められる活動を経験しており、“愛着意識 無”の層は子供会のイベントなど自発的ではなく受動的な参加が考えられる活動を経験していることがわかった。

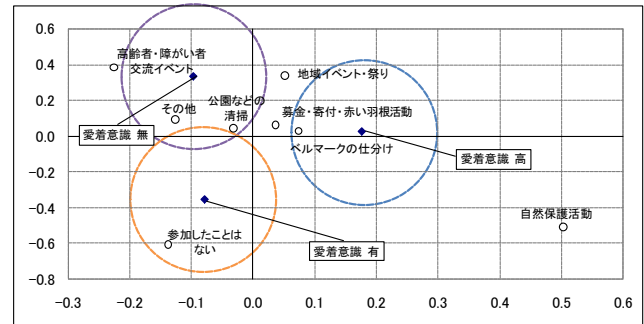


Figure4 Results of analysis of types of

community activities

#### ③地域活動経験における考察

以上の分析より地域活動を経験することは地域愛着意識の醸成にある程度影響があると考えられる。しかし、地域活動をただ受動的に経験するのではなく、児童が主体性をもって活動することや活動において様々な質の高い経験を行うことこそが地域愛着意識の醸成に繋がると考えられる。

### 6.2 日常会話に着目した分析

#### ①家族との日常会話

小中学生の地域愛着意識と家族との日常会話の関連性を Figure5 に示す。1 日の会話時間は小中学生ともに長くなるほど“愛着意識 高”の割合が増加する傾向にあるが、小学生は“愛着意識 無”の割合も増加することでもわかった。また、特に“3 時間以上”と回答した中学生は地域愛着意識が非常に高

い傾向にあることがわかった。また、会話内容の種類が多くなるほど小学生は“愛着意識 高”と“愛着意識 無”の割合が高くなる傾向にあり、中学生は会話内容数が“3種類以上”になると“愛着意識 無”の割合が大きく低下する傾向にあるとわかった。会話内容の種類については、小中学生ともに“将来のこと”を話している児童は“愛着意識 高”の割合が高い傾向にあるとわかった。

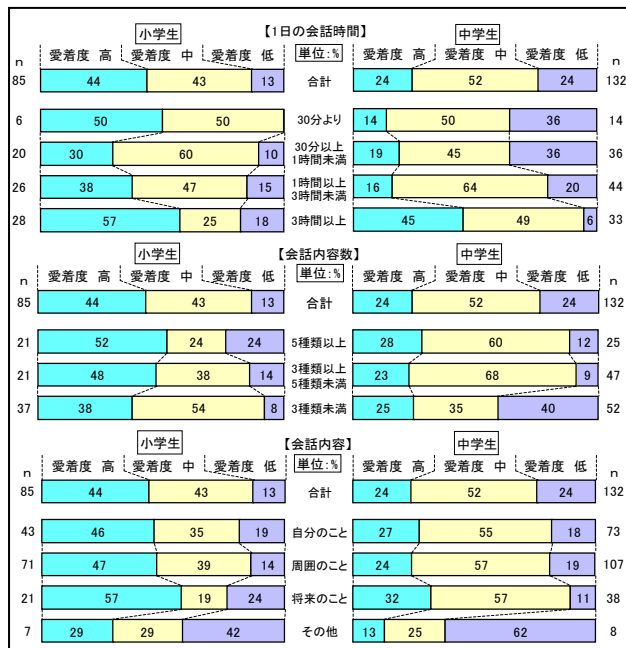


Figure5 Association between sense of community attachment and daily family conversations

## ②友人との日常会話

小中学生の地域愛着意識と友人との日常会話の関連性を Figure6 に示す。1日の会話時間に着目すると、小学生は特に傾向が見られなかったが、中学生は会話時間が長くなるほど“愛着意識 有”以上の割合が高くなる傾向があるとわかった。また、会話内容の種類が多くなるほど小学生は“愛着意識 高”の割合が多くなる傾向にあったが、中学生は特に傾向は見られなかった。会話内容については、小中学生ともに“将来のこと”を話している児童は“愛着意識 高”の割合が高い傾向にあるとわかった。

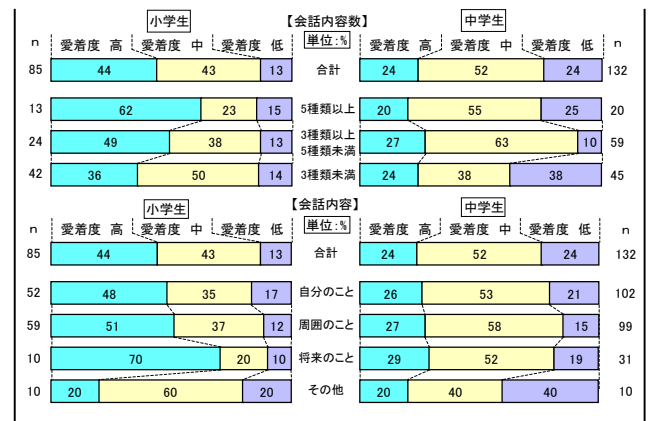
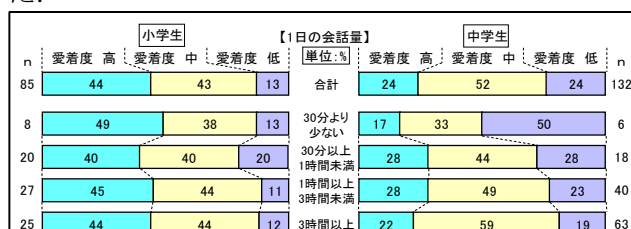


Figure6 Association between sense of community attachment and friends' daily conversations.

## ③家族・友人の日常会話における考察

以上の分析結果を Figure7 に示す。小学生は家族・友人共に日常会話と地域愛着意識の関連性が高く、中学生は小学生に比べ地域愛着意識との関連性が薄くなることがわかった。これは、小学生よりも中学生が部活動や習い事など関わる人や所属コミュニティが増加、多用化することで一つのコミュニティや家族友人との直接関わる時間と質が低下していることが考えられる。また、どの層においても会話内容に“将来のこと”を話す児童は地域愛着意識が高い傾向にあることから、夢や目標などの自身のプライベートな情報を開示しても受け入れてくれる環境の構築が愛着意識を醸成すると考えられる。

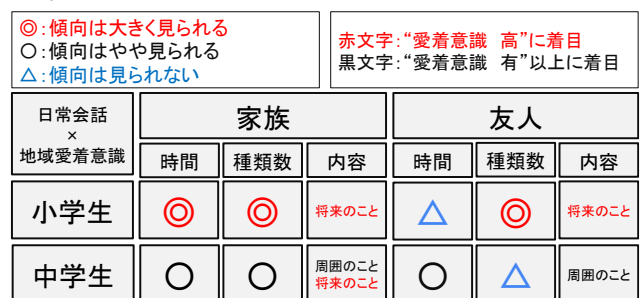


Figure7 Results of analysis of daily conversation and local attachment attitudes

## 7. まちへの意識と地域愛着意識

まちへの意識として、まちがどのように発展してきたのか、現在のまちはどのようなになっているのか、将来まちはどのようなようになってゆくのかの 3



つの視点から地域教育施策の実行をするに辺り、歴史・産業・町役場の取り組みの三つに分類し、現状の小中学生におけるまちの理解度や興味関心などを把握し、愛着意識との関連性を分析する。なお、学校の授業で行われる地域教育に関しては小学3年次のみ行われていることを確認しているため、小学生と中学生でのカテゴライズ分別の必要性がないと考えられることから、今回は小中学生を混合して分析を行った。

### 7.1 まちへの理解度・興味関心・認知経路と地域愛着意識の関連性

#### ①まちの歴史と地域愛着意識

まちの歴史と地域愛着意識の関連性を示した数量化Ⅱ類による分析結果を Figure8 に示す。地域の歴史における理解度は“全く知らない”層は地域愛着意識が低い傾向にあることがわかった。また、興味関心については“とても興味がある”層は地域愛着意識が高い傾向にあることもわかった。さらに、認知方法では“人から認知した”層は地域愛着意識がやや高くなる傾向にあるとわかった。

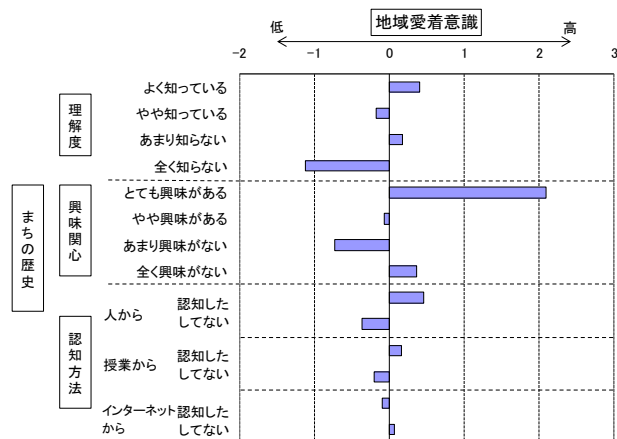


Figure8 Historical understanding, interest and cognitive pathways

#### ②まちの産業と地域愛着意識

まちの産業と地域愛着意識の関連性を示した数量化Ⅱ類による分析結果を Figure9 に示す。地域の産業における理解度は“全く知らない”層は地域愛着意識が低い傾向にあることがわかった。また、興味関心については“とても興味がある”層は地域愛着意識が高い傾向にあることもわかった。さらに、認知方法では“人から認知した”層は地域愛着意識が高くなる傾向にあるとわかった。

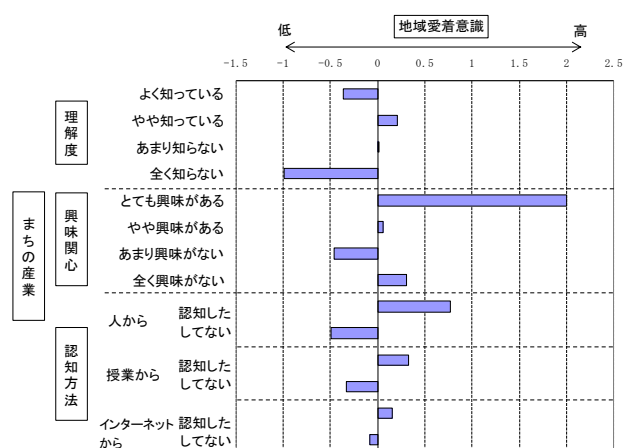


Figure9 Industry understanding, interest and awareness pathways

#### ③町役場の取り組みと地域愛着意識

町役場の取り組みと地域愛着意識の関連性を示した数量化Ⅱ類による分析結果を Figure10 に示す。取り組みにおける理解度は“全く知らない”層や“よく知っている”層の地域愛着意識が低い傾向にあるとわかった。また、興味関心については“とても興味がある”層は地域愛着意識が高い傾向にあることもわかった。さらに、認知方法では“人から認知した”層は地域愛着意識がやや高くなる傾向にあるとわかった。

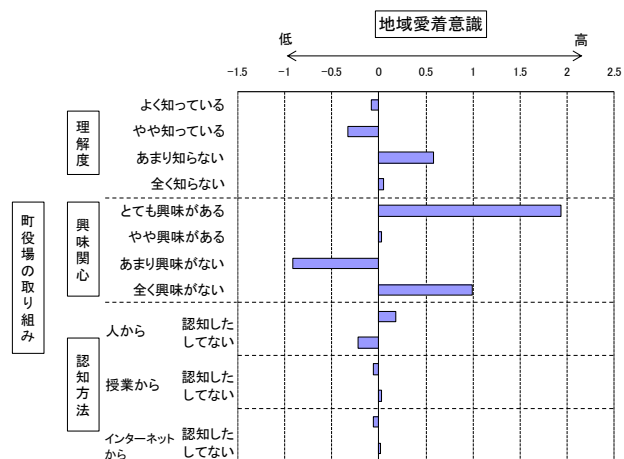


Figure10 Understanding of, interest in and awareness of town hall initiatives

#### ④まちへの意識に関する考察

歴史と産業における理解度は、“全く知らない”場合に地域愛着意識が低下する傾向が認められた。また、興味関心と地域愛着意識には一定の相関が認められ、認知方法に関しても人から認知することで地域愛着意識が高くなる傾向にあることがわ

かった。認知方法に着目すると、人から認知する場合は身近な関係の人物からの可能性が高く、対面且つ直接的に知ることができるため自身の知りたいことが理解することができると考えられる。このことから、親子まちづくり教室は対面での質の高い直接的な学びを行う必要があることと伺える。

## 8. 考察を基にしたプログラム検討詳細

以上のまちとの関わりや意識における分析結果・考察から、地域愛着意識を「まちづくり教育プログラム」内で醸成するために質の高い学習・体験を小中学生に対して提供する必要があると考えられる。

### 8.1 まちづくり教育プログラム構想

プログラム構想図を Figure11 に、まちづくり教育の一般的学習段階（2013 玉田）を Figure12 に示す。まちづくり教育では多くの場合「まちを知る」の段階で留まる特徴があるが、本プログラムではまちづくり教育の一般的な学習段階<sup>4)</sup>を全て通して行う。質の高い経験を提供するために地域のことを知るだけに留めず、考えて行動を起こす一連の流れで進行する。また、地域との関係を根強いものとするために小中学生の親・友人・上級生や下級生といった様々な年代を混合したグループでプログラムを行うことで、縦の関係の創出に繋がると考えられる。

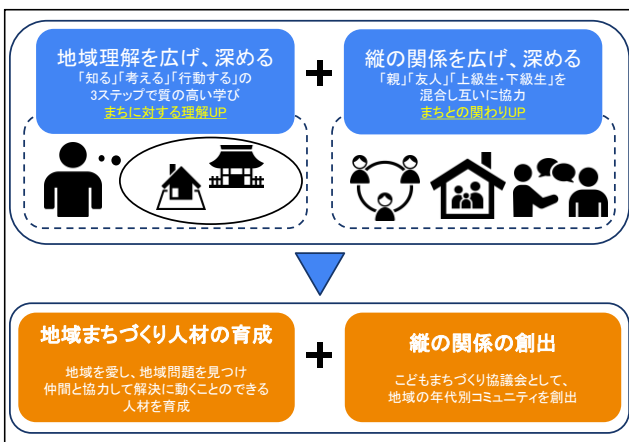


Figure11 Conceptual diagram of the community development education programme

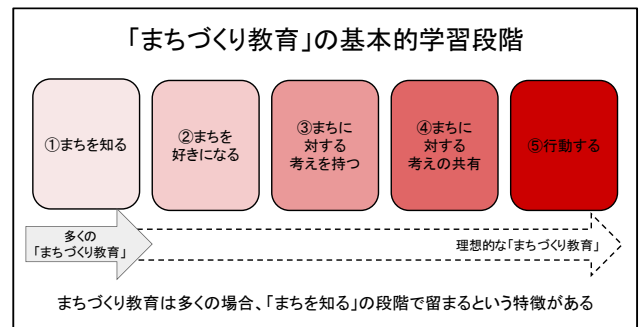


Figure12 General learning stages of community development education (2013 Tamada)

### 8.2 初年度における教育カリキュラム案

初年度における教育カリキュラム案を Figure13 に示す。このカリキュラムでは、地域まちづくり人材の育成と縦の関係の創出を行うため、質の高い学習・体験を小中学生に対して提供するために考案した。本カリキュラムの構成としては、地域理解編、体験学習編、まちづくり入門編、まちづくり実践編、まちづくり案提出編の全5章である。具体的には、地域の特徴をプログラム内で捉えつつも小中学生が楽しく参加でき、生涯学習として様々な質の高い体験を行うことを前提として設定した。そして、地域の産業や環境を知るだけに留めず、実際にフィールドワークや体験学習を通して理解する部分までに踏み込み、そこで得た地域理解を活かしてまちづくりというフィールドにおいて実際に考え、実行するまでを一貫して行う。そうすることで、小中学生における地域理解が深まると共に、地域との関係も深めることができ、地域まちづくり人材の育成と縦の関係の創出を行えると考えられる。

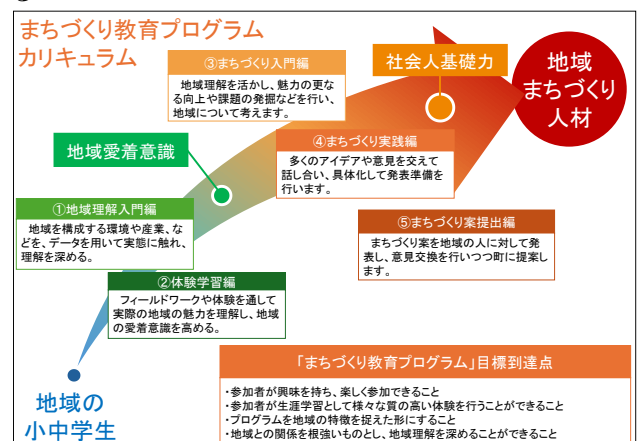


Figure13 Draft education curriculum for the community development education programme in the first year

## 9. まとめ

①地域活動経験は地域愛着意識に関連性が認められたが、ただ受動的に経験するものではなく、児童が主体性をもって活動することや活動において様々な質の高い経験を行うことのできる活動こそが地域愛着意識の醸成に繋がると考えられる。

②日常会話と地域愛着意識には関連性が見られたが、中学生は小学生に比べ地域愛着意識との関連性が薄くなる。これは関わる人や所属コミュニティが増加、多用化することで日常会話の時間と質が低下していることが考えられる。また、どの層においても会話内容に“将来のこと”を話す児童は地域愛着意識が高い傾向にあり、自身のプライベートな情報を開示しても受け入れてくれる環境の構築が愛着意識を醸成すると考えられる。

③まちのことに関する認知方法に着目すると、人から認知する場合は愛着意識が高い傾向にある。これは身近な関係の人物から認知する可能性が高く、対面且つ直接的に知ることができるため自身の知りたいことが理解できる環境にあり、愛着意識に繋がると考えられる。

④地域愛着意識を「まちづくり教育プログラム」内で醸成するためには質の高い学習・体験を小中学生に対して提供する必要があると考えられる。

⑤質の高い学習・体験を小中学生に対して提供するために、地域のことを知るだけに留めず、考えて行動を起こすまでの一連の流れとして企画した。また、地域との関係を強いものとするために小中学生の親・友人・上級生や下級生を混合したグループでプログラムを行うことを検討した。

## 10. 今後の展望

今後は今回検討したプログラムをもと、今後は実証実験を行うことで地域愛着意識醸成の効果測定を行う。

## 謝辞

本研究を行うにあたり、長瀬町教育委員会をはじめとする各関係機関よりご協力を賜りました。厚く御礼申し上げます。

## 文 献

- 1) 作野広和：人口減少社会における関係人口の意義と可能性，経済地理学年報，Vol.65，pp.10-28，2019.
- 2) 国土交通省 国土計画局：持続可能な地域づくり・まちづくりへのヒント～市町村の取組み事例から～,2010.
- 3) 長瀬町企画財政課：長瀬町人口ビジョン 長瀬町まち・ひと・しごと創生総合戦略，2016.
- 4) 玉田 洋：「まちづくり教育」の現状についての考察「まちづくり」を「教育する」ことにおける課題，21世紀社会デザイン研究，No.12，pp.93-102，2013.

小中学生における地域愛着意識の基礎的研究  
—埼玉県長瀬町の事例—